移民のモティベイションに関する研究序説

～オーラル・ヒストリー、コレクティブ・バイオグラフィー、ペルソナグラフィー、パーティシパント・オブザベーション～

天沼　香

はじめに

移民は、ある意味で極めて安定した日常的な空間状況から、敢えて諸々の危険が伴う非日常的な空間状況へと自らを半永久的に移動せしめる行為である。したがって、そこには他律的であるか、あるいは主体的であるか、その両者が混在したものであるかはともかくとして、かなりはっきりとしたモティベイションが存在している事が多い。

この諸々のモティベイションに着目し、それらを明らかにする事は、取りも直さず各々の移民状況を的確に把握する事ばかりではなく、その時々の時代状況の一端を知る事にも繋がる。こうした認識のもと、私は本稿において、移民に関する大状況と関わるモティベイション並びに小状況と関わるそれらに関して言及したいと考えている。

本稿は、前々稿「マクロな移民研究とミクロな移民研究の有機的連関のために」（『東海女子大学紀要』、第23号、2004年3月）および前稿「日本における資本主義の発展と移民送出との相関関係～後発資本主義国日本の出移民の普遍性と特異性をめぐる考察～」（『東海女子大学紀要』、第24号、2005年3月）の続編的意味合いを有する作品である。

1

先の稿で触れたように、1930年代において、大日本帝国政府が満州開拓移民（という名の植民）をかなり積極的に推進せざるを得なかった背景には、19世紀末から20世紀前半にかけて、北米への日本人移民が厳しく制限されていったという事実が横たわっていることは否めない。

このように日米関係、日加関係等の国際関係が移民の流れに大きな影響を及ぼしたことは、史観の如何を問わず、歴史的事実として広く共通に認識されるべきであろう。

とともに国内の諸事情も移民には多大な影響を及ぼす。日本という非常に狭い国土しか持たない国に多数の人間が住んでいる以上は、その多大な人口を何とか養っていかなければならない。養うために、殖産興業を唱えて、工業生産を上げ、それによって多数の人口を糊することを図るとともに、口減らし、即ち人口を海外へ送り出すこと、人口移動を促進することが、近代に突入した日本にとっては重要な課題だった。

このように、日本にとって非常に重要な課題であった移民を考える場合、その動機に着目することは極めて重要なのである。日本においては所謂、移民多出県、あるいは移民先進県等と称される、移民を多数、送出している県と、そんなに送出していない県とが顕著に分かれている。

日本国内各地からまんべんなく移民が海外へ出ているのでは決してなく、日本国内でも場所によって多数の移民を出しているところと、殆ど出していないところとの差は顕著なのだ。

たとえば移民を非常に多数、出している県を見ると、先にも触れたように、滋賀、和歌山、福島、宮城の各県等、徳川方＝佐幕の藩から県に移行したところが多い。その理由の一端には先の論で触れた。

しかし、この佐幕云々との絡みだけが移民のモティベイションではないことは言うまでもない。倒幕方＝新政府側の藩が多かった九州各県にも移民送出県は多いし、山口県、広島県なども移民の多い県である。移民多出県の第1位は、広島県であり、同県は多数を、カナダ、アメリカ、ハワイへ、少数だが南米へと海外各地へま

んべんなく移民を送り出している。

同県に続く移民多出県は、２位＝山口県、３位＝沖縄県、４位＝福岡県、５位＝和歌山県、６位＝福島県である。これらの県がどうして移民を多出しているのかというと～様々な観点から様々な原因が考えられるけれども～、ひとつの要因として、過剰労働力の存在が考えられる。つまり労働力がだぶつき、この余剰となった労働力が移民として押し出されるという見方ができるのである。これと連動している事象だが、貧困も移民を誘発する要因として見逃せない。

ただし、過剰労働力と貧困という現象は、戦前の日本においてはどの県にも一般的に見られた現象であった。であるから、その２点だけをもって移民をプッシュする、移民を送出する動機と考えるのはあまりにも軽々な見解と言わざるを得ない。

2

そうしてみると、上記のような物質的な問題だけではない何か、つまり、精神的な問題も、移民のモティベイションに多大な影響を及ぼしていたと考える方が正鵠を射た見解といえよう。移民の精神面を探っていくと、例えば先の論で触れたように、偶々、自らが属していた藩が佐幕方であったがために、明治維新以降、不遇をかこち、最早、日本に留まっていても展望は開けないというような心情を抱かざるを得なくなった事が、一人ひとりの個人の行動になにほどかの影響を及ぼしたといった事等も考えられるのだ。

もうひとつ、移民をするということは、進取の気風といったメンタリティーとの関連も考えられる。ここで、話が急に古い時代に飛ぶ事をお許し頂きたい。縄文時代中期あたりから所謂、縄文農耕が始まったと言われている。それ以前の日本は、狩猟、漁労、採集の社会だった。即ち、人々は移動を常態とする生活をしていた。たとえ縄文農耕がおこなわれるようになった後においても、これは主たる生業ではありえなかったと推測されるので、縄文時代全般を通して、移動生活が人々の基本的な生活のパターンだったろうと思われる。

ところが、弥生時代に入ると、水田稲作農耕が一般的になってくる。日本人の主流が定着の水田稲作農耕民になっていく。それ以降、日本人の基本的な生活のパターンというのは定着、定住をベースとしたものとなっていく（例外的存在として、漂泊の民も存在していたが）。

定住の農耕民族は、狩猟民族や遊牧民族のように常なる移動をこととして生活をする民族とは、自ずと行動や思考のパターンも異なる。長い年月の中で、民族の【定住】生活のパターンが固まっていけば、それに伴って【移動】は逡巡するようなメンタリティーが醸成されていくであろうことは想像に難くない。

弥生時代に定着・定住の水田稲作農耕民という基本的な生業のパターンを持った大多数の日本人にとっては、移住する、移動をすることは必ずしも日常的な事柄ではなくなったと言わざるをえないのだ。確かに日本人は民族的なレベルでの大移動は経験したことがない民族である。大航海民族でもない。

歴史上のごく一時点において、日本人町がタイ等々、東南アジアの国々にできたという史実はあったにせよ、それは歴史的な伝統として続くことはなく、潰え去ってしまった。

さらには、近世において、長らく鎖国の状況が続いたという事情も手伝って、余計に定着・定住を身上とするようになった日本人は、移動することには強く逡巡する傾向を示すようになったのかもしれない。江戸時代において、国替え、転封、移封といえば、どちらかといえばマイナスの意味合いを有していた。もっと言うなら、それは懲罰的な意味合いで成される事が多かったのだ。

3

こうした歴史文化的風土、政治的風土を勘案すると、開国し、近代に入ってからも、日本人にとって、海外に生活の拠点を移す事、移民する事は、相当なモティベイションと決断を必要とする行動だったと考えられよう。

それこそ、意を決して悲壮な覚悟で故郷を離

れる、という移民も少なくなかったのだ。そこにはやはり単なる生活上の問題、あるいは経済上の問題だけではない、メンタリティーの問題がモティベイションとして介在していたと言わざるを得まい。

それを証明する一つの事実として、先の論で触れた写真花嫁が挙げられる。写真花嫁として、写真結婚をして北米大陸へ渡っていった女性たちを見てみると～全てに当てはまるとまでは言えないにせよ～、少なからぬ彼女たちは、日本で当時としては高い教育を受けており、それなりに自分の考えを持ち、主体的に行動しようという意欲を持っていた人々であった。

私自身がオーラル・ヒストリーを集積しようとして語り合った日系一世の高齢女性の経験談からも、それは明らかである。何らかの進取の気風というのか、「もうこんな古い因習に閉ざされた日本では自分は暮らしたくない。だから新天地を求めてアメリカに渡ろうと思った」といった気持で写真結婚をして、新たな自分の生活のステージへ飛び込んでいったというような体験談を語ってくれた女性が多かったのだ。

彼女たちの移民に関するモティベイションは相当に高かったのである。だからこそ、先の稿でも少々、触れたように、未知の男女が作り上げていった家庭が、意外なほどに民主的で、男女平等だったりするのである。

先述の片山潜、山本宣治、鈴木悦等も、それぞれに当時の日本の状況に不満を持ち、新しい生活、新しい社会を志向するなかで、やはり一時、移民に志向した人たちであった。

こうした可視性の高い人々ばかりではなく、ごく一般の移民の人々の中にも、単に一攫千金を目論む～ビジネス・チャンスを窺う～といった経済的動機ばかりではなく、新しいところで新しい生活を打ち立ててみよう、よりよい自らの居場所を探そうという意欲～のようなもの～が見て取れるのだ。このような内在的、精神的な要因が移民を促進するひとつのモティベイションになった事は紛れもない事実といえよう。

4

続いて、こうした移民の精神的なモティベイションを探る方法に関して、少々、言及しておこう。それらを、文書史料、すなわち公私の書き残された文書から発掘する事は決して容易とはいえない。自伝的な叙述でもないかぎりは、日記にすら、自らの移民の精神的要因などの記載はあまり見られないからである。

そうしてみると、それらを解明するためには、～これは同時代史＝近現代史研究の特権といえようが～、生き証人からの聞き取り、インフォマントからの聞き書きが数少ない有効な手法として浮かび上がってくる。ここに、歴史学的な視座からの移民研究におけるオーラル・ヒストリー収集の重要性が見出せる。

聞き取り調査に言及したところで、さらに、移民へのアプローチの仕方に触れておくこととしよう。移民を研究する場合には、多様なアプローチの仕方がある。

これまでの移民研究の経緯からいうと、主流は歴史学よりも社会学的、あるいは文化人類学的なアプローチだった。文化人類学的なアプローチの場合、～これは私も試みている方法だが～、、長期参与観察＝《パーティシパント・オブザベーション》と称される方法が重要である。

要するに、移民の人々と実際に生活を共にし、その社会の一員として認知されるなかで、彼等の思考や行動のパターン、社会関係、文化変容等々を認識していくことを基調とするフィールドワークの方法である。

このフィールドワークの方法としての《パーティシパント・オブザベーション》のなかで、私は、個々の移民の人びとの生きた軌跡や思考を知るために、私なりの方法論を実践している。これは、～歴史学と文化人類学との学際的な領域からのアプローチの仕方ではないかと私は考えているが～、コレクティブ・バイオグラフィーという方法である。決して目新しいものではないが、少なくともまだ日本では学問的に明確に認知されている方法論とは言い難い。

オーラル・ヒストリーという方法自体、日本

ではまだ緒についたばかりで、方法論的にも確立されているとはいえない。むしろ歴史の新しい国々、アメリカ合衆国やカナダ、オーストラリア等においては、これは歴史学におけるひとつの重要な方法論として定着している。

しかし、日本においては、オーラル・ヒストリーという手法は、たとえば御厨貢の政治史的な研究のように、竹下登、後藤田正晴らのような～その往事において政策決定過程に重要な役割を果たした～政治家などにインタビューをし、十二分に吟味＝テキスト・クリティークしたうえで、その記録を文章化して、それらを現代史のひとつの史料として活用するというようなケースに用いられる事が多い。

すなわち、まだ日本ではオーラル・ヒストリーは、政策決定過程に関与しうるような、相当に可視性の高い人間をインフォマントとし、当該人物に対する聞き書きを、然るべき処置を施した上で同時代史の史料とするといった脈絡のなかで使用されることが多い方法ということができよう。

5

言うまでもなく、それはそれとして極めて重要な史料収集の仕方であり、それによって公私の書き残された文書だけからではみえてこないものがみえてくることも多々ある。政治家、経済界の重要人物等の素顔が透けて見えてくることもあろう。直接的なインタビューによって、可視性の高い人物たちの隠れた個性、思考、人間関係等々が明かになる事もある。その意義は十二分に認めたい。

けれども、私自身としては、どちらかといえば可視性の低い、もう少しいうならば、公私に渡って文書などはあまり残さないであろう層の人びとに対してこそ、聞き書き、オーラル・ヒストリーという手法が威力を発揮するのではないかと考えている。

日本人移民や日系人の人びとにしても、そんなに多くの史料になりそうな書かれた公私の文書を残してくれているわけではない。個人的に日記を書いていた人びと、ちょっとした手記を残した人びと、移民地での自らの苦労話や成功した自慢話を基調とした自伝的叙述を残している人びと等はいる事はいる。しかし、それらの書き残された私文書的な史料のみからでは、国際関係の推移によって翻弄された彼等の人生の軌跡、社会関係、生活全般、行動パターン、文化変容等を十全に抽出することは不可能である。

その欠を補うという意味ばかりではなく、より積極的に彼等のライフヒストリー～私の唱える［ペルソナグラフィー］（この用語に関して詳しくは、天沼「移民史への視座」［1986］を参照されたい）～を全体的連関の中で把握するという意味においても、彼らの生活信条の変化を具さに捉えるという意味においても、差別・偏見を受けたことへの彼らの対処の仕方を具体的に知る上でも、聞き取り調査をベースにしたオーラル・ヒストリーの持つ意味合いは非常に大きいと私は考える。

であるがゆえに、私は、移民研究に際して、この手法をなるべく積極的に取り入れたいと考えている。けれども、移民の人々に対する、このオーラル・ヒストリー構築のための聞き取り調査に際して、非常に難しい点がひとつある。

それは何か。いうまでもなく、日本人移民や日系人の人びとにとって、戦時中に強制収容所（＝コンセントレイション・キャンプ，インターンメント・キャンプ、決してリロケイション・センターなどという生易しい代物ではない）に送られ、非人間的な生活を強いられたという事実は、本当に屈辱的であり、苦痛であり、人によっては他者には語りたくない事実であるという事なのだ。

米兵（あるいはカナダ兵）監視のもと、プライバシーなどは一切、配慮されず、一つの家族が他の家族と同じ生活空間を共有させられるような環境。そうした環境下において、日常的に夫婦である一対の女と男が肉体的接触を持つことすら憚られるような状況に置かれる酷薄さ。こんな強制収容所における生活など思い出したくもない、まして、その屈辱的な体験を他者に語るなんてことはしたくないと多くの体験者が思うのはけだし当然といえよう。

6

かつて私が新聞のコラムに寄稿した文章をここに再掲しておこう。

「木漏れ日の公園での心地よい午睡・・・。が、オレゴンの秋の夕陽はつるべ落とし。目を覚ました私に、待っていたかのように話しかけてくる人がいた。『あなたは日本人じゃない？どうしてこんな所に一人でいるの』。たどたどしい日本語の主は、黒い瞳に長い黒髪の清楚な東洋系の女性だった。私は、日系人の歴史や文化変容の研究のために米加両国に長期滞在していること、今は一世の古老の方々を訪ねて、移住の動機や当地に来てからの生活の変化、大戦中の収容所での体験等について聞き書きをしていること等々を話した。

やや長い私の説明が終わると、彼女は今度は英語で流暢に、しかし、意外な返答をしてくれた。『私は日系三世よ。私の祖父や父も、収容所生活を体験してるわ。あなたが、私達日系人に関心を寄せてくれることは、大変うれしい。でも、老いた一世に強制収容のことを根掘り葉掘り尋ねるのはよして欲しい気持ちよ。だって余程、嫌な辛い経験だったらしくて、祖父は私が聞いても、「古傷に触れてくれるな」とだけ言って、あとは無言。その沈黙が彼の苦痛を物語ってるの。だから・・・』。

もう十二年も前、ポートランド市のとある公園での出来事、彼女の端正な横顔とこの言葉を鮮明に甦らせてくれたのは、アラン・パーカー監督作品『愛と哀しみの旅路』（原題 ´Come, SeeThe Paradise´）だった。

1942年2月19日、大統領命令　第9066号発令。これにより、日系人の指定地域からの立ち退きの強制そして収容に、即ち人種差別に法的根拠が付与された。こうして11万人に及ぶ米国市民たる二世も含む日系人が自由と富を奪われ、屈辱的な収容所生活を強いられた。

米議会は、1988年、ようやく日系人への正式謝罪と賠償支払いに関する法案を可決した。が、『愛と哀しみの旅路』のパパー・カワムラやハリーのような立場にいた人々は決して帰っては来ない。

そして、彼女の祖父はまだその過去を語ってくれようとはしない」（天沼「彼女の祖父」[『朝日新聞』コラム、1991年5月25日付夕刊]）。

この新聞コラム欄掲載の拙文は、若気の至りというべきか、やけに感傷的な文章ではある。が、それはともかく、ここで言いたいことは、日本人移民の人びと、わけても一世の人たちや日系二世の人たちが、強制収容の体験に関して、非常に誇りを傷つけられ、嫌な気持ちを強くもっているだけに、～先のオレゴンの彼女の祖父ではないが～、孫が聞いても答えようとはしてくれないという事実がある事を忘れてはならないということである。

身内が聞いても、答えてくれないのに、まして赤の他人が～研究者面をして、何の配慮もなしに～、どうなんですか、こうなんですか等々、古傷を抉るような事を尋ねたりしたら、それこそ「そんなこと聞くな」、「そんな話、させないでくれ」と一喝されかねない。それほどに、体験者の屈辱感、そしてその心的外傷が深いことを、研究者は明確に認識しておかなければなるまい。

偶々、私が、戦時中の強制収容に関する話等を聞かせていただこうとして接触した高齢者の方々は、幸いなことに本当に熱心に体験談を語ってくださった。彼らは、自分たちの屈辱的な体験を、二度と誰かが体験しなくても済むように語り継いでもらいたい、といった願いを込めて、決して思い出したくはないであろうことの数々を話してくださったのだった。

けれども、そうしたことは話したくない方々も少なからずいること、それらの人びとの古傷を抉る権利は何人にもないことは、広く移民研究者のフィールド・ワークに際しての共通認識とすべき基本的事項の一つといえよう。

黙して語ってくれようとはしない日本人移民、日系人の存在。これこそが、移民の人びとからの聞き書き調査の難しさの最たるものであり、その限界を明示するものでもあり、オーラル・ヒストリー作成の際の越えることの出来ない、大きなネックなのである。

7

聞き書き調査を拒否されたことは、実は私にもある。それは、北米での日本人移民・日系人に関する調査の折りではなく、日帝支配下のコリアンの人びとの日本本土への移住のモティベイションや対日観に関する調査のために韓国に滞在していた時の事だ。

ソウル在住の私の韓国人の親しい友人のお母さんは、韓国が大日本帝国の植民地だった時代に、日本国から非人道的な扱いを受けた体験をもつ人だった。友人からそういう話を色々聞いていたので、私は～贖罪の意味も込めて～、彼女の体験談を聞いて、自国の暗い過去を知らない日本の人たちに伝えよう、そうすることによって、忌まわしい事件、事象が二度と起こらないようにしたい、というような願望をもって、その友人に頼んだ。「あなたのお母さんにそれらの話を聞かせてもらいたいので、会わせてもらえないだろうか」と。

しばらくして返答があった。「申し訳ない。率直にいうと母がこういった。ちょっといいにくいことだが、『私は日本人の顔なんかみたくもない』というんだ」と。私は「そうか」、としか言えなかった。やはり、被害を受けた人は、それだけの痛みを内包している。六十年以上の歳月を経た後でも、まだその痛みは癒えていないという現実があった。

だから、日系のお年寄りが強制収容の話はしたくないというのは当然かもしれない。孫にもそれを話そうとしない高齢者もいる。先に触れたオレゴンの彼女が言ってくれたように、その沈黙そのものが体験の凄惨さを物語って余りあるのだ。

「何も言いたくない」という人には、「わかりました」と言うしかない。韓国での体験に話を戻そう。韓国の友人は「すまんなあ。自分は、母に、『確かに友達は日本人だけれども、彼は戦前の日本のコリアに対する植民地支配を反省し、謝罪した。だからこそ我われは友人なんだ』、と強調したけど、母は首を縦には振らなかった」と言ってくれた。私は「分かった。有り難う。君の好意に感謝する。君のお母さんの心を乱して申し訳なかった」と答えるのが精一杯だった。

私は、この韓国人の友人に対して、～当たり前すぎて恥ずかしくはあったが、本当の気持ちを吐露するつもりで～、「日本の戦前の朝鮮半島全域に対する植民地支配、搾取、その他諸々に関して、～もちろん私自身は『戦争を知らない子供たち』世代の人間ではあるけれども～、近い過去において日本国があなたの国に屈辱的な仕打ちをしたという歴史的事実に関して、心底、反省しているし、お詫びしたい」と言ったことがある。これが彼と非常に親しくなったきっかけだった。

それまでは、ちょっと会って話をする程度の付き合いだった。が、上のような話をした時に、彼がどういう対応を示したかというと、それは私の想像を大きく越えたものだった。不意に私の両手を強く握って、「言いにくいだろうに、はっきり言ってくれて有り難う。これまでの蟠りが氷解したよ」といって、彼は涙を流さんばかりだったのだ。

「なんか僕は、とても嬉しくなった。ハッピーな気分だ。もう君とは本当に親友だね」とまでいってくれた。私も大変、嬉しくなったことを覚えている。こんなところから、彼とは色々、深い話ができる仲になった。そんな中で彼は、「実は自分の母親はね、日本軍のためにひどい目に遭ったんだ」云々という話も聞かせてくれたのだ。

そこで、私も思い切って、彼の母親の話を聞かせてもらいたい旨、彼に頼んだところ、上のような答が返ってきたのだった。彼は続けて、「本当に申し訳ない。自分としても勿論、日本が過去にコリアンにひどい仕打ちをしたことに対する憤りは消えていない。けれども、今は日本人だって変わってきてるんだし、若い世代とは親しくしていける。しかも、彼（＝私・・・筆者注）は、過去の『日帝の悪業』に関してきちんと認識し、贖罪したいと願っているということまでいったんだが、母の堅い気持ちは和らげられなかった」と述懐してくれた。

「あくまで会いたくない、の一言だった」という彼の話を聞いて、改めてコリアンの日本および日本人への「恨」の根深さに思いを至さざる

をえなかった。言うまでもなく、その「恨」の根源を成すのは日本（人）の側の所業である。

現在、日本と韓国、北朝鮮の間にあって直接、問題になっているのは、戦前・戦中の三十数年間の朝鮮半島に対する植民地支配等、近代日本のコリアへの一連の対応というのが、日本人の一般的認識ではないかと思われる。

が、コリアンにとっては、それだけではない。彼らにとっては、秀吉の朝鮮侵略～誇大妄想的な征明への道程としての朝鮮征伐～にしてからが、怪しからん行為として、明確に認識されている。唐・新羅連合軍の攻撃を受け、存亡の危機に瀕していた百済を救援すべく、中大兄皇子が軍を送り出して戦った、あの白村江の戦いすら朝鮮に対する主権の侵害だという認識をもっている人も少なくない。そうなると、それこそ千数百年、少なくとも数百年の間の歴史に関する不信感の重なりの上に今日のコリアンの人々の対日観があることを思い知らされる。

8

話が飛んでしまった。元へ戻そう。オーラル・ヒストリーという手法には、上述のように相手が話したくない、話せないといったら、それでおしまいという限界が伴う。さらに聞き書き調査の結果得られた史料、あるいは史料としてのオーラル・ヒストリーは、書かれた文書よりも史料的な価値が低いことは事実として否めない。

人間たるもの、誰しも、自分にとって都合の悪い事実は隠蔽したがるし、自分にとって都合の良い事実は強調したがる。当然プラス面にせよ、マイナス面にせよ、当の本人が話す内容には誇張やその逆が入り込んでくることは否めない。

さらに～これはオーラル・ヒストリーに限らず、同時代史ー近現代史研究を考える場合の一般的な陥穽といえようが～、関係者が生存しているという冷厳な事実があるので、当該の関係者に迷惑がかかってはいけないという話し手の自己規制も働く。利害関係があるような場合には事実が語られないとか、事実が曲げて語られる懸念も無いとは言えない。

このように、オーラル・ヒストリーという手法は、諸々の意味で限界がある方法論ではある。しかし、その限界性を十二分に認識した上で、この手法を用い、厳密なテキスト・クリティークを行ったうえで史料として用いるならば、これは一定限の有効性のある「個」へのアプローチの仕方といえよう。そして、その手法の基本になるのは、インフォマントとの親和関係・信頼関係～ラポールの確立～である。これなしには、事実は語ってもらえない。

9

移民研究に関する方法論として重要なパーティシパント・オブザベーションについて、もう少し言及しておこう。柳田国男の言うように、物事を観察する場合には、三つのレベルの目がある。

(1) は、旅人、旅行者の目で、その人を、その社会を、その文化を見る。
(2) は、滞在者としての目で、その人を、その社会を、その文化を見る。
(3) は、生活者の観点、生活者の目で、その人を、その社会を、その文化を見る。

端的に分ければ、以上の三つの視座から、個人、社会、文化に接することができるだろうというのだ。

そして、言うまでもなく、旅人の目よりは滞在者の目、滞在者の目よりは生活者の目でもってその人を見る、その文化を見る、その社会を見るほうが、その人、その文化、その社会の実態が良く見えてくるだろうと思われる。

けれども、そうとばかりはいえない面があることも否めない。旅人の目、滞在者の目、生活者の目といえば、これは滞在期間が問題になってくるわけで、当然、期間としては旅人が一番短いだろうし、滞在者が二番目に短く、生活者ということになれば、これはその場を生活の場とするくらいに長い期間、そこに住むというかたちになるだろう。

長期間に渡って、当該の人々と当該の社会の中で生活を共にしていれば、短い期間、その場

に滞在しているよりも、その社会の諸々がよく見えてくる事は当然である。

しかし、逆に旅人の目として新鮮な目で見ていられたものが、滞在する、あるいは生活をするというように、その場にいることが長期間になっていくことによって、その旅人の新鮮な目が～「慣れ」によって～濁ってきてしまうこともなきにしもあらずといわざるを得ない。

したがって、一つの社会をきちんと把握するためには、フィールド・ワーカーの滞在期間が長期であればあるほどよいとばかりもいえない。やはり短期的・集中的に新鮮な目で鋭く、その人、その文化、その社会を掘り下げて見るという視点も重要である。

ただ文化人類学的なパーティシパント・オブザベーションを実施する場合、最低、一年間はその場に滞在して、フィールド・ワークを行うことが望ましいとはよくいわれるところである。なぜかといえば、一年間を通してその場で生活すると、フォークロアでいうところの年中行事や通過儀礼を一通り見ることができるし、歳時記的にそれぞれの時期における労働慣行等にも接することができるからだ。

このような意味において、一年間というのは貴重な期間として認識される。確かに、これまでに輩出している精緻なモノグラフ《エスノグラフィー》の多くは、～ラドクリフ・ブラウン、ブロニスラウ・マリノフスキー、レヴィ・ストロース、マーガレット・ミードらの華々しい学問的業績を引き合いに出すまでもなく～、最低でも一年、あるいは二年といった期間をその場で生活した、すなわちパーティシパント・オブザベイションを行った実績の上に作り上げられたものが多い。

であるから、もし可能であるならば、一つの移民社会を見る場合でも、やはり最低でも一年間はそこで生活するというかたちで参与観察をしながら民族誌的な記述を行うことは、有効な方法である。私も、カナダにおいて、それくらいの期間のフィールド・ワークを実践した経験がある。

こうした長期参与観察を実践すると、その人びとのありよう、その文化のありよう、その社会のありよう等に関して、色々な事象が広く深く見えてくることは事実である。けれども、先述のように、その場に慣れてくるにしたがって、新鮮な目でくっきりと見えていたものが見えなくなっていくという状態に陥りかねないことには重々、留意しておく必要がある。

10

次に、移民とはどういう存在なのかという命題について言及しておこう。先にも少々触れたように、江戸時代において二百数十年間に渡り鎖国をしていた日本では、その間ずっと人口は三千数百万人で、殆ど変動がなかった。ところが、近代に入ると物凄い勢いで人口が増え始める。そこで、その急増する人口をなんとか養っていくことが明治新政府、明治国家の緊要の課題になった。

この課題に対して、新政府はまずは殖産興業を標榜する。産業を興す、工業を盛んにする、機械制生産の態勢を作り上げていくというようなことで、なんとか多くの人々の口を糊する事を図る。とともに、政権内外の先見性のある人々の間では、少なからざる人々を海外へ送出することの必要性も明確に認識されていた。

これに関連して、明治初期においては、国内移民も盛んだった。国内移民は、海外に出て行く移民とはニュアンスを異にするので、これに関して詳しくは触れないけれども、最小限のところを述べておこう。日本で国内移民といえば、いうまでもなく北海道への移住が主である。

前近代において、蝦夷地の箱館奉行は、沿岸地域の開拓に力を入れていたといういきさつがある。まして明治時代に入って、北辺の守りを固めることが一つの緊急課題として出てきた中で、非常に重要な意味合いを持つ政策の実践として北海道への移民が遂行されることになった。

1875年（明治八）、屯田兵が北海道に入植する。その年以降、かなりな速度で北海道開拓が進められていくことになった。この開拓の担い手が北海道移民、つまり国内移民、あるいは内

国移民と称される人びとだった。

そもそも北海道開拓は、戊辰戦争で敗れた東北諸藩の藩士達が新しい生活の活路を求めて北海道に入ったのが嚆矢といわれている。これがある意味では近代的な国内移民の始まりと考えてもいいのではないかと私は考えている。これに関して、先ほど述べた話が歴史法則的に適用できよう。

つまり、東北諸藩は、戊辰戦争で敗れた佐幕方ということで当然差別を受ける。将来に希望は持てない。それなら一層のこと、北海道で一旗上げようと気持ちが高じてくる。これは当然な流れといえよう。そうした意味においては、榎本武揚等の蝦夷島共和国建設の意図とも重なるような感覚だったと言っても言い過ぎではなかろう。

言うまでもなく、屯田兵制度は勝った側＝官軍側の北海道開拓使の黒田清隆の建議が元になって具体化していった。その第一陣が先ほど述べたように1875年（明治八）に入植することになったのである。屯田村では人びとは、八畳と六畳の二間の小さな家で、不自由な生活を強いられながら開拓に従事し、しかも屯田兵という字面からも明らかなように北辺の守りの一端を担う～少なくともそれに関して補完的な役割を果たす～存在として期待されていた。

そうしてみると、この屯田兵という存在は、満州開拓農民という存在とどこかで共通する面があるように思われる。食料を増産する、雇用を促進する、北辺の守りを固める、日本の本土において不遇だった人びとの不平・不満の捌け口とする、その他、両者には諸々の共通点が見出せるのである。

北海道は日本国の主権の及ぶ地域になっていたとはいえ、先住民たるアイヌの人々の主権を侵しながら、内地の日本人が入植していくという格好になっている場所だった。

そして、歴とした中国の国土であった東北部に日本が勝手に傀儡国家を作り上げたのが満州国である。そうしたバックグラウンドの歴史的推移の点においても、北海道への内国移民と満州開拓移民（という名の植民）には類似している面があると言わざるを得ないのである。

又、少々話を北海道、屯田兵に戻す。戊辰戦争等に敗れた失意の東北諸藩の藩士達が北海道に陸続として移民する。例えば、北海道には現在も伊達市という市があるけれども、この地域は、東北の伊達藩出身の人々が作り上げた入植地なのだ。こうした場所が、奥羽越列藩同盟を結成して、新政府側に反抗し、やがて一敗地にまみれた人びとの新しい生活の場、居場所になったのだった。

明治四年ぐらいから現在の北海道の道都、札幌の建設が始まった。明治六年頃になると、北海道の人口が大体十六万人位に膨らんでくる。それでは、もう少しきちんと整備していこうということで、屯田兵制度等が具体化してくることになった。さらに明治十年代に入ると、かなり大規模な形で開拓団といった組織的集団が北海道へ続々と入植し始める。

例えば、明治十四年という年は、北海道開拓に関しては大いに期を画する重要な時期である。この年には広島、兵庫、香川等といった各県の士族や平民の人びとがどんどん北海道に入植してきている。赤新社といった開拓を促進する事を目的とする団体も設立されている。そうした団体が、北海道入植は将来有望な事業というようなことを喧伝し、さらには屯田兵、その他もろもろのかたちで北海道に入植することは、取りも直さず国家に貢献することといった喧伝をも行った。こうした状況の中で、北海道移民がどんどん進展していくことになったのである。

11

北海道開拓に関して、これ以上は別稿に譲る事として、話を海外への移民に戻そう。明治維新以降、上述のような公的なモティベイションや私的なモティベイションに基づく内国移民も企てられたけれども、同時期には、海外への移民にも大きく目が向けられ始める。どのような脈絡の中で、それが現実的な課題として取り上げられてくることになったのかという問題に関しては、ひとまず後回しにしよう。

取り敢えず、ここでは先の論で言及したよう

に、移民研究に関して、～特に内国移民ではない、海外への移民を歴史的に捉えるという意味合いにおいて～、重要なのは、移民は日本の資本主義の発展とストレートに関係があるという視座であることを再確認しておきたい。

さらには、移民先の国々、地域（すなわち移民受容国や地域）の資本主義の発展とも無関係ではありえない事にも十分、留意する必要がある。もっと言うならば、世界的な規模で、それぞれの国々、地域の資本主義の発展段階、貧富、好況・不況といった状況を明確に視野に入れ、それら諸状況との絡み合わせの中で移民を調査・研究・考察してこそ、初めて大状況的なレベルでの移民研究といえよう。

こうした大状況との絡み合わせの中での移民研究のうえに、個々の人々の口を糊する問題、性向や気風の問題、その社会関係、コミュニティー形成の問題、文化変容・文化同化の問題、差別や偏見の問題等の個別的、小状況的な移民研究を重ね合わせて、構造的、立体的な移民の位相を明らかにしていくというのが、私流の移民に関する研究の基本スタンスである。

さて、私が移民研究の対象としている主なフィールドは、米国本土およびハワイ、カナダそして南米のボリビア、ペルー等である。したがって、～これまでは総論的に移民の近代史的な位置付け、移民と米国やカナダ等＝移民受容国の側およびヨーロッパ諸国＝移民送出国の側、双方における資本主義の発達との関連性、さらには移民と日本の資本主義の発展との関連、そうして移民研究の方法論等について、地域をあまり限定せずに、一般的なかたちで述べてきたけれども～、次節以降では、具体的に米国本土およびハワイ、カナダ、ボリビア、ペルーあたりを中心にして移民を論じていくこととしたい。

12

カナダの日系移民社会は、世界各地への日本人移民の中でも最も日系社会＝日系人コミュニティが解体している移民集団の一つである。対して、ボリビアの日系移民社会は、世界各国、各地域への移民の中でも最も日系社会＝日系人コミュニティを強固に保っている移民集団の一である。こうした点において、両者は対極的な存在といえよう。

さらにカナダ移民の人びとを見てみると、その移民のモティベイションがはっきりしているケースが多い。これに関連して私は先に、移民の動機には、物質的、経済的なモティベイションと、精神的なモティベイションとがあることを説いた。前者は、より強く大状況と関わり、後者は小状況と絡み合うことは言うまでもあるまい。

移民をプッシュする要因として、過剰労働力、不況、貧困等といった物質的、経済的なモティベイションや、挫折感や失望感からの脱却・新規まき直し、また進取の気風や性向云々といった精神的なモティベーションが考えられることは既に述べた。

日本からカナダへの移民の場合、前者、後者の諸々が絡み合わさって関連している事は事実である。しかし、戦前期、戦後期を問わず、多くのカナダ移民の主たるモティベーションには進取の気風が大きく与っていることは、私のフィールドワークの結果からみても明らかである。

カナダへ移住した人びとには、移民の時期を問わず、～戦前期には戦前期なりに、戦後期には戦後期なりに～、新しいより良い生活空間を求めてとか、ビジネスチャンスを求めてとかいったモティベイションが内在している。より主体的なかたちでの移民が顕著に見受けられるのである。この事に関しては別稿で詳しく述べる事にしよう。

それに対してボリビア移民は、明治期にペルーに労働者として移民し、そこからさらにボリビアへ移った人びとをもって、その嚆矢とするが、彼らの移住のモティベイションは必ずしも主体的であったとは言い難い。そもそも、これらの移民の人びとは、19 世紀末に、一時的に好景気に沸いたゴム園に雇われた出稼ぎ労働者だったのだ。しかも、彼らは極く少人数だった～百人に満たなかった～し、継続的でもなかったので、日本人ボリビア移民の中では例外

的存在と見なす事ができる。ボリビア移民の主潮からは除外する事ができるのだ。

あくまで、日本人のボリビアへの移住の主潮は戦後にあるといえよう。歴史的に見て、ボリビア移民の主流は、戦後の米軍による占領統治下の沖縄県からの移民、並びに同じく戦後の日本の産業構造の大転換のもとでの九州各県からの移民という事になる。

そして、その各々のモティベイションは、これまた非常にはっきりしている。沖縄からボリビアへの移民の～うちのかなりな数の人びとの～移住した（あるいは、せざるをえなかった）理由ば、沖縄の米軍基地化に伴う土地の喪失である。

敗戦によって、日本は連合国（実質的には殆ど米国）に占領された。わけても沖縄は過酷な占領に直面し、全土は米軍基地化の憂き目をみた。沖縄の人々は耕すべき土地を奪われる事になった。

こうした事態に対して、当事者能力のない琉球政府はなすすべを知らなかった。当然の事ながら責任を負うかたちで米国政府が、世界各地で代替地として適当な場所を探索した結果、アマゾンの源流に近いボリビアの奥地に、全く未開拓なジャングルを見つけた。折良く、ボリビア政府も、手つかずのその地を開拓すべく、同地への移住者を求めていた。

こうして同地を、～米国政府、ボリビア政府、琉球政府の思惑がうまく絡み合った結果～、自らの先祖伝来の土地を米軍基地のために奪われた沖縄の人々に与えるという方策が現実のものとなってきたのだった。

要するに、沖縄の米軍基地化によって沖縄を離れざるを得なくなった人々が、ボリビアの奥地のジャングルをあてがわれ、否応なく同地に移民をした（させられた）というのが歴史的事実なのである。そこには、主体的な選択の余地などは介在しなかったといわざるをえない。彼らは、大状況的な客観的状況（国際関係とりわけ日米関係）の変化に伴って、沖縄を出ることを強いられた人びとなのである。

もう一つ、九州からボリビアへの移民にも明確な理由が見出せる。九州各地には戦前から戦後にかけて、日本の工業の進展を基底において支えていた炭鉱があった。ところが、戦後、暫くするとエネルギー政策の転換や産業構造の変化に伴って、それらがどんどん廃坑になっていった。当然、失業者、行き場所を失なう人々が出来（しゅったい）した。

炭坑離職者の多くは、国内の他の産業に従事すべく、大都会へと流れていった。他方で、少数の炭坑夫の人たちとその家族は、「もう日本では暮らしていけない」と見切りを付けて、新天地を求めてボリビアへと移民していったのだった。

このように、戦後におけるボリビア移民は、日本の被占領、沖縄の米軍基地化であるとか、日本の産業構造のドラスティックな変化、エネルギー政策の転換といった大状況の変化と非常に深い関連を有している。

そうした点において、ボリビア移民は、戦前戦後を通してのカナダ移民のようなビジネスチャンスを求めてといった自由移民の形態とは違った形態の移民として認識せざるをえないのである。

さらにカナダという国とボリビアという国を比較してみると、基本的に、前者は北米に位置する世界でも有数の豊かな先進国家であるし、後者はといえば貧しい南米の中でも最も貧しい発展途上国ということになる。

両国は、このように国情も地域も全く違う。そして、日本からの移民のモティベイションも全く異なる。そして移民先のコミュニティのあり方も様相を異にしている。かくして、ボリビアの移民地、ボリビア移民の人びとと、カナダの移民地、カナダ移民の人びととは、様々な意味において世界各地に出て行っている日本人移民の中で両極端なあり方を示していると考えられる。

こうした事実をもって、私はボリビアとカナダを移民研究のフィールドとして重視しているのである。

それから、もう一ヶ所、ハワイの日系社会を私は移民研究先として重視している。ここは一つの大きなポイントがある移民地だからだ。つまり、ハワイは、日本人の移民先としては唯一、

日系人が相対的に多数を占める希有な地域だからである。かつては、ジョージ・アリヨシという日系の政治家がハワイ州知事を二期にわたって務めたこともあった。さらには、もし日系人初のアメリカ副大統領が輩出するとしたら、この人以外ではありえないと謳われたのが、ハワイ州出身のダニエル・イノウエ上院議員だった。

このように、ハワイの政財界や教育界等において相当に重きをなしていたのが日系人だったのだ。このような日系の移民地は世界中どこを見渡してみても他にはない。こうした点において、ハワイ日系社会は、カナダ、ボリビアとはまた違った意味で非常に特色のある日本人の移民地ということができる。そうした理由で私は、日本人の移民、日系社会を調査・考察する際には、この三者を中心に考えているのである。

おわりに

本稿では、移民に関して、そのモティベイションに着目しつつ、それを明らかにする方法としてのオーラル・ヒストリー、コレクティブ・バイオグラフィー、ペルソナグラフィー、さらにはパーティシパント・オブザベーションに言及した。

カナダ、ボリビア、ハワイ、満州等々、個別の移民(植民)地への移(植)民の状況に関しては、次稿以降でその詳細に触れていきたい。

参考・引用文献

・天沼香未刊「カナダ・フィールドノート」
・天沼香未刊「ボリビア・フィールドノート」
・天沼香未刊「ハワイ・フィールドノート」
・天沼香未刊「満州植民に関する覚え書き」
・天沼香『日本史小百科〈近代〉家族』(1997年、東京堂出版)
・正田健一郎「日本資本主義と移民」(社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』、1984年、有斐閣)
他。